



OVER20  
& Company.

# 創造性の多面的検討 ～創造的な個人を育てるには？～

サービスに関する独自調査

2024/3

©2024 OVER20&Company, Inc. All rights reserved.



株式会社 OVER20 & Company . 〒105-6027 東京都港区虎ノ門4丁目 3-1 城山トラストタワー 27 階  
contact@over20-company.com <http://www.over20-company.com>

# 目次

はじめに

創造性の正体に迫る

創造性に対する効力感の重要性

工二一生の創造性の効力感

むすびに：創造性に満ちた社会のためにできること

執筆者：OVER20 INITIATIVE OCEAN

研究室長 宮澤 優輝

## Take Aways!

- 創造性は個人に内在する固定的なものではなく、接する状況によって有しているかが変化する！
- 創造性の発揮において重要なのは「創造性に対する効力感」である！
- 工二一生には「創造性に対する効力感」を有している個人が集まっている！
- 新規性に対する許容度を増加させることで創造的な個人を生み出すことができるかもしれない！

創造性の多面的検討  
～創造的な個人を育てるには？～

©2024 OVER20&Company, Inc. All rights reserved.

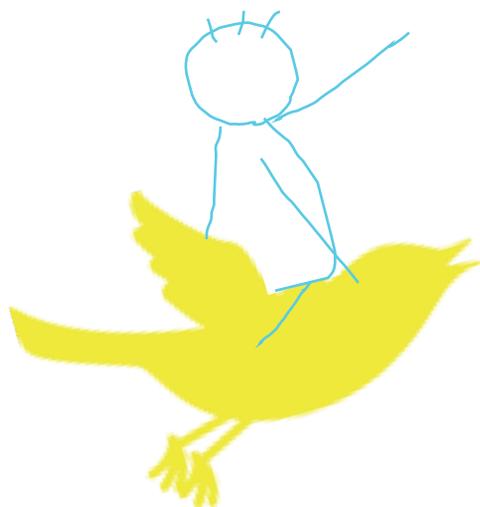


# はじめに

世の中は「創造性」に魅せられている。70%以上の雇用者が2024年に創造的思考が最も需要のあるスキルと考えていることが複数の調査より明らかとなっている。創造性は絶え間なく変化する競争環境に適応し、競争優位を獲得すると考えられ、人工知能（AI）が多様な場面で活用される中で人間に独自の能力であると考えられている。我々は往々にして創造性が個人に内在するものであると考え、例えば性格特性と関連させて創造性を捉えようとする。実際、本機関においても以前、私たちのサービスを利用するエニー生の創造性が高いと、ビッグ・ファイブ・パーソナリティの理論を援用することで示した。

このようにますます創造性に注目が集まっているものの、創造性とは何であるか定義するのは容易ではない。多くの場合、創造性は習慣的でない新規性を有する、そして同時に有用である成果を生み出す能力や活動を形容するために利用される言葉である。新規かつ有用な成果を生み出せるか否かで創造性が定義されるのであれば、創造性があるかは必ずしも個人に内在するものではなく、個人がどのような領域において活動しているかにも依存しているだろう。つまり、個人とその個人を困む環境の双方の条件がそろって創造性があるか否かが規定される。

本稿では、パーソナリティの観点から創造性を検討して以前のレポートとは異なり、このような視点からエニー生の創造性を検討し、また、創造性を育成するにはどうすればよいかに関するアイデアを提供する。



## 創造性の多面的検討 ～創造的な個人を育てるには？～

©2024 OVER20&Company, Inc. All rights reserved.



# 創造性の正体に迫る

創造性は個人が自らを困ら環境とどのような関係性にあるかに大きく依存する。例えば、どれほど自分が身を置いている環境について知識を持っているか、自信を有しているか、その環境にいる他者とどのような関係を築いているかが創造性を左右する。特定の領域に対する知識は創造性にとって諸刃の剣である。一方では知識を組み合わせること、あるいはあたら知識を有することが創造性につながるため、知識量は創造性につながると論じられているが、他方では特定の構造を持つ知識を持つことで創造性が制約されるとも示されている。同様に自信についても、多すぎず少なすぎない「スイートスポット」が存在すると組織心理学者のアダム・グラント氏は述べる。自らの能力に対して自信を持ちながらも、同時に適切な解決策や問いを持っていないことを考慮する「自信ある謙虚さ」が必要だと論じている。また、他者との関係について、しばしば弱い紐帯を持っていることで、自らと異なる知識や考えに触れることができ、創造性につながると考えられている。しかし、構築したアイデアを創造的な成果につなげるために、アイデアを形にし

実現するには強い紐帯が必要であると知られている。あるいは集中という日常生活の中での状態を取り上げても、同様に難しいバランスが存在する。集中していない状態の中で知識の間に新たな結合が生じるが、その一方で集中状態がなければ新たな結合をアイデアへと昇華し、あるいはアイデアの実現方法まで思考することはできないだろう。

創造性が個人と環境の間関係性に宿るものである前提に基いて議論すれば、上のように一概にどのような状態が望ましいか断じることができず、調整しなければいけないバランスが複数存在することが分かるだろう。そのため、以前のレポートで論じたように創造性とは個人に内在する性質に左右はされるものの、接する状況に応じて絶えず変化するものであると分かる。創造性とはいわば、新規かつ有用な成果を生み出すことができる、バランスが取れた個人と環境の関係性である。このバランスの取れた関係性とは、適切な知識量かもしれないし、自信の度合いや集中状態かもしれない。

## 創造性の多面的検討 ～創造的な個人を育てるには？～

©2024 OVER20&Company, Inc. All rights reserved.



# 創造性に対する効力感の重要性

さて、創造性を発揮するには多様な環境との関係を調整する必要があり、そのためには創造性を発揮しようとする試行錯誤が必要とされる。アイデアを生み出し、表現し、試しに実現しようとする試みが存在しなければ、知識量や自信量、他者との関係性などが適切な状態にあるかを検証するための情報は生み出されない。その意味において、創造するための試行錯誤が創造性の発揮には必要不可欠である。加えて、試行錯誤そのものが創造性を高めると考えられる。創造性においてアイデアの質が重要ではあるが、アイデアの質を担保するのはアイデアの量である。例えば、前出のアダム・グラント氏はブレインストーミングにおいて初めて出るアイデアは新規性が低く、創造的で非習慣的なアイデアを生み出すには200ものアイデアが必要であると論じている。

そのため、既存研究の中で言及されている「Creative Confidence」、本稿では「創造性の効力感」と訳すが、を創造性の発揮において重要な性質として取り上げる。創造性の効力感とは、「a development of trust in one's own creative skills」と定義され、いわば自らの創造性に関する自己評価である。

創造性の効力感とは2つの理由から創造性にとって重要である。第一に、前述の通り、試行錯誤を通じて自らが創造性を発揮できる外部環境との関係性を調整することができる。実際に、創造性の効力感を有している個人は自らの創造性を磨き続ける傾向にあると指摘されている。もっとも、試行錯誤のみでは不十分であり、試行錯誤を通じて得られた情報に基いて知識の状態などを変化させる必要がある。第二に、創造性の効力感とは、本来自ら封じている想像力や考えを解き放つのに寄与する。多くの人は創造的に生まれてくるが、しかし、社会に溶け込み教育をうける中で他者の判断のまなざしに敏感になり、警戒し、分析的になる。創造性の効力感とは、本来持ち合わせている発揮するための動機となる。現に、創造性に対する効力感とは創造性に寄与することが指摘されている。また、これらの2つのメカニズムを反映するように、創造性によってもたらされた創造的な成果は、創造性に対する効力感を高め、そのため創造性とこの効力感とは相互に強化しあう可能性が指摘されている。

創造性の多面的検討  
～創造的な個人を育てるには？～

©2024 OVER20&Company, Inc. All rights reserved.

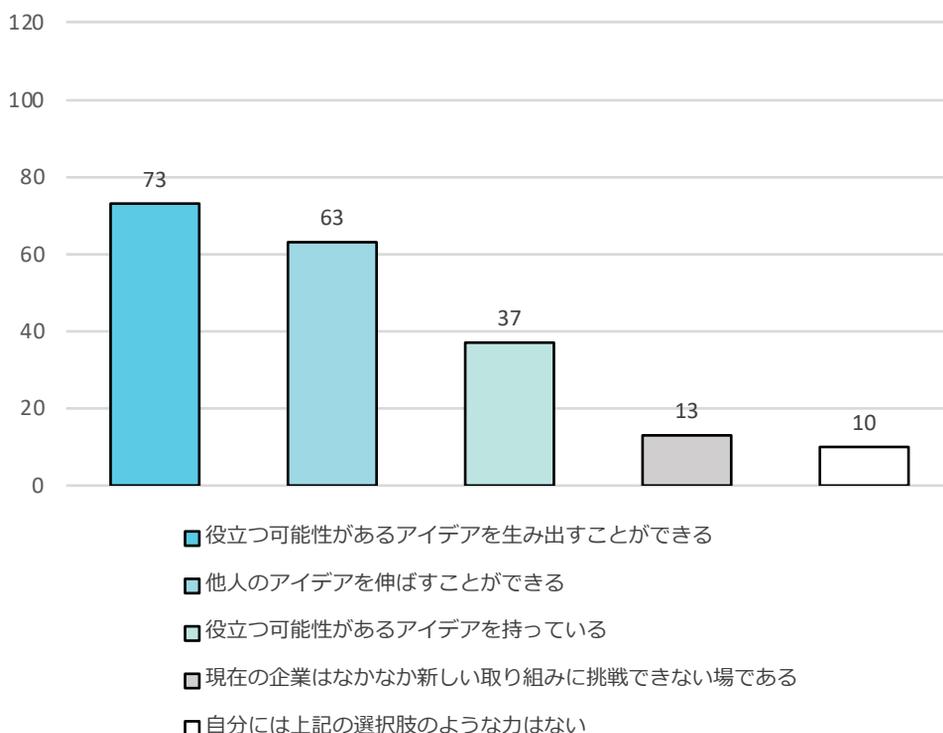


# エニ－生の創造性の効力感

エニ－生には、今後改善の余地がありながらも、比較的多くの個人が「役立つアイデアを生み出すことができる」「他人のアイデアを伸ばすことができる」あるいは「役立つ可能性のあるアイデアを持っている」と考えている。また、エニ－生には社会課題に関心を持っている個人も多く、このアイデアや創造性を社会課題の解決に活かすことができる個人が集まっていると思われる。

## 自らの創造性への評価

(n=121、複数回答可の質問)



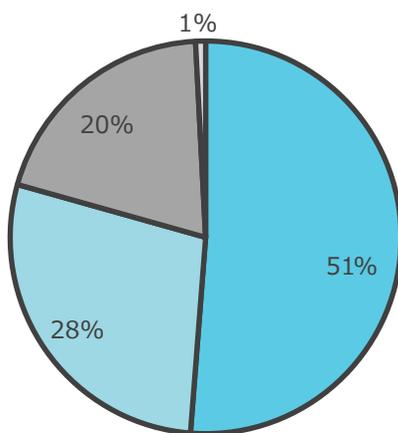
創造性の多面的検討  
～創造的な個人を育てるには？～

©2024 OVER20&Company, Inc. All rights reserved.



## 社会課題への関心

(n=121、複数回答可の質問)



- 関心があって、解決に取り組もうと考えている
- 関心があって、解決に取り組んでいる
- 関心はあるが、自分は解決に寄与できないと考えている
- 関心がない

### OCEAN Diversity Way

図表については、ユニバーサルデザインを登用し、全ての方に見やすい表現に取り組んでいます

## 創造性の多面的検討 ～創造的な個人を育てるには？～

©2024 OVER20&Company, Inc. All rights reserved.



# むすびに：創造性に満ちた社会のためにできること

本稿では、創造性は必ずしも個人に内在するものではなく、個人とその個人を囲む環境の関係性の中に存在する可能性を指摘した。これは創造性の効力感の重要性を示唆する前提であると同時に、個人の創造性に任せるのではなく社会全体として創造性を高めるために取り組まなければいけないことを意味するのではないだろうか。子供の育て方しかり、教育システムしかり、人材育成しかり、合理的な判断ができながらも創造性が過度に失われないようにする必要

がある。また、多くの場合、有用で新規なアイデアはヒエラルキーの中で消えていく。心理的安全性という概念が日本国内でここまで広まったのも、このような課題を認識しているからかもしれない。就職する前に企業と創造的な活動を行い、自らが何らかの有用なアイデアを提案できることを経験してもらう当社の社会実践プログラムも、創造性に満ちた社会に寄与する取り組みの一つである。

- 
- i. <https://www.forbes.com/sites/rachelwells/2024/01/28/70-of-employers-say-creative-thinking-is-most-in-demand-skill-in-2024/?sh=2bda0039391d>
  - ii. [https://www.jstage.jst.go.jp/article/pacjpa/83/0/83\\_3C-001/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/pacjpa/83/0/83_3C-001/_pdf/-char/ja)
  - iii. E.g. <https://brilliantio.com/why-knowledge-leads-to-creativity/>  
<https://bpspsychub.onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1111/joop.12011>
  - iv. E.g. <https://www.sciencedaily.com/releases/2017/03/170322152736.htm>
  - v. Think Again
  - vi. E.g. Perry Smith, J. E., & Mannucci, P. V. (2017). From creativity to innovation : The social network drivers of the four phases of the idea journey Academy of Management Review, 42 (1), 53 79.
  - vii. E.g. <https://dhbr.diamond.jp/articles/-/4911>
  - viii. <https://www.cnbc.com/2018/02/05/whartons-adam-grant-explains-how-to-be-more-creative.html>
  - ix. Rauth, I., Köppen, E., Jobst, B., & Meinel, C. (2010). Design thinking: An educational model towards creative confidence. In DS 66-2: Proceedings of the 1st International Conference on Design Creativity, ICDC 2010. Hasso-Plattner Design Thinking Research Program, Hasso-Plattner-Institut für Softwaresystemtechnik GmbH.
  - x. Tierney, P., & Farmer, S. M. (2011). Creative self-efficacy development and creative performance over time. Journal of Applied Psychology, 96(2), 277–293.
  - xi. Reclaim Your Creative Confidence Managing Yourself How to get over the fears that block your best ideas by Tom Kelley and David Kelley
  - xii. Ivcevic & Hoffmann (2021) : The Creativity Dare: Attitudes Toward Creativity and Prediction of Creative Behavior in School
  - xiii. Karwowski & Beghetto, 2019 : Creative behavior as agentic action.

創造性の多面的検討  
～創造的な個人を育てるには？～

©2024 OVER20&Company,.Inc. All rights reserved.

